

三河アララギ

平成二十七年

十一月号

第六十二卷 第十一号



ニューヨーク日記(109) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Central Park

Blue Shoe Diaries



夏も終わりね～あまりにも気持ちいい日だから朝ごはんを買いに出たらそのままセントラルパークに（パンとコーヒーを手に）散歩しに行ってしまった。何時もピクニックに行く広場は草刈りしたばかりでいい香り! それに誰もいない!ピクニックに来なくてはい! サッと明日の天気予報をチェック!明日のピクニック決まり! 朝の公園散歩って良いかも! 秋の紅葉も楽しみだなあ。

Lamenting that summer is over, we went out to go get some breakfast and found ourselves strolling through the park (with breakfast pastry and coffee in hand) because the weather was just perfect! This is such luxury in NYC. With hardly anyone at Sheep Meadow, we got inspired and quickly planned an end-of-summer picnic for tomorrow!

目次

第六十二卷第十一号(通卷七四三号)

表紙	ホトトギス	今泉	由利	(1)
ニューヨーク日記(109)	Blue Shoe	(2)		
感銘歌 御津磯夫第十歌集		(4)		
歌集「スモン」	大須賀寿恵	(5)		
歌集「草々」	今泉 米子	(6)		
密の実	今泉 由利	(8)		
仏間の君	弓谷 久子	(9)		
好きな事	青木 玉枝	(10)		
種採り	内藤 志げ	(11)		
現代の世相	林 伊佐子	(12)		
稲の花	安藤 和代	(13)		
ニオイザクラ	足立 晴代	(14)		
北富士	鈴木 孝雄	(15)		
百日草	清澤 範子	(16)		
秋風が吹く	伊藤 忠男	(17)		
国勢調査	富岡 和子	(18)		
花芙蓉	森岡 陽子	(19)		
お誘い	近藤 映子	(20)		
引馬野の詩	白井 信昭	(21)		
孫の香奈	半田うめ子	(22)		
味見	阿部 淑子	(22)		
美味しい	杉浦恵美子	(23)		
葡萄	山口千恵子	(24)		
落柿舎(2)	夏目 勝弘	(25)		
『こよせ』	いーはとぶ	(26)		
	山崎 俊子	(26)		

現代学生百人一首	森 厚子	(27)		
私の一首	東洋大学	(28)		
	青木 玉枝	(30)		
	鈴木 孝雄	(30)		
	林 伊佐子	(31)		
	富岡 和子	(31)		
	杉浦恵美子	(32)		
	今泉 由利	(32)		
	近藤 映子	(33)		
	夏目 勝弘	(33)		
	松本 周二	(34)		
	山元 正規	(34)		
	今泉 由利	(34)		
	川井 素山	(35)		
	小柳千美子	(35)		
	重野 善恵	(35)		
	田中 清秀	(36)		

三田美奈子	(26)			
水野 絹子	(26)			
牧原 規恵	(26)			
稲吉 友江	(26)			
鈴木美耶子	(27)			
吉見 幸子	(27)			
牧原 正枝	(27)			
岩瀬 信子	(27)			
石田 文子	(27)			
森 厚子	(27)			
青木 玉枝	(30)			
鈴木 孝雄	(30)			
林 伊佐子	(31)			
富岡 和子	(31)			
杉浦恵美子	(32)			
今泉 由利	(32)			
近藤 映子	(33)			
夏目 勝弘	(33)			
松本 周二	(34)			
山元 正規	(34)			
今泉 由利	(34)			
川井 素山	(35)			
小柳千美子	(35)			
重野 善恵	(35)			
田中 清秀	(36)			

森岡 陽子	(36)			
山道 京子	(36)			
柳田 皓一	(37)			
和田 勝信	(37)			
植村 公女	(37)			
田中 清秀	(38)			
山元 正規	(38)			
丸山酔宵子	(40)			
大橋 望彦	(42)			
今泉 雅勝	(44)			
鮫島 満	(46)			
山本紀久雄	(48)			
辻 照子	(50)			
『歴代天皇御製歌』(四十四)				
貫名海屋資料館	(52)			
(四十五)				
夏目 勝弘	(54)			
岡本八千代	(55)			
今泉 由利	(56)			
『氷魚』のことから(178)				
ことのはスケッチ(443)				
今泉 由利	(56)			
編集室だより(二〇一五年 九月)				
三河アララギ	(58)			
和菓子街道(109)				
平松 温子	(59)			
お知らせ・編集三河便り・三河アララギについで	(60)			

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

檐に鳴る朱の風鈴の短冊に蘇鉄の若き葉のびてとどきぬ

P 1 8 7

病室の孀の言つてに今朝よりは黒き一重の羽織を重ぬ

P 1 9 8

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

取り捨てられしスベリヒユの花ふみてゆくつぶるる音を楽しみながら

区切りつつ二声に啼く明け鴉吾が平家建の棟のあたりか

不安とも悲しみともつかず起き上る眼にしみるサルビアの花

歌集 「草々」

今泉米子

薬室に一つ残せるあかりの下わがのむ薬をわが包みゆく

黄素馨の青茎ゆらくガラス戸に三ひら二ひら朝よりの雪

貝寄風吹きて一日をさまらず明細書の計算たどとする

土の色にかたくりの幼き一葉出づ去年の位置より少し移りて

十九歳にて国家試験に合格せる父が毛質筆写の医学書五冊

父の代よりたまれる未収のカルテの束崩れて棚の色変りゆく

疲れつつ日々過ぎゆきて木の下に自らなるイボタン萌えをり

きのふ来し母の日の手紙おもひをり夕映えながき青羊歯の庭

朝飯のうちに決まりて志す奈良の北山十八間戸

注射器を一つ小さく描き添へてあこちゃんはびょうきがすみました

白き潮しほ

蒲郡 岡本八千代

中学生の君らいつしか五十五歳平成子牛会のけふはクラス会
集ひたる末広館の南窓伊勢の海潮しほ白く見えつつ

ここの宿「天空海遊」とも書かれるて高所より巡るけふの海潮

今となりて女教師われが呼び捨てにしたるを嬉しと言ひてくれたり

男をの子らも髪薄くなりしをてれつつも注ぎくれたりあかきウーロン茶を

三年後にも来てねと言ひしに來られないとわれは言ひつつ帰り来てしまひぬ

飛行雲の白き交差の空仰ぐ久しぶりなる晴れの秋空

ノボタンの花紫の花びらの散り敷しく上を踏みて歩めり

漱石の好きな花とか思ひつつも木瓜の角枝切りてしまひぬ

久しぶりにネクタイ結びて家出づる後ろ姿の夫を見てゐたり

六十三回の形象派展のけふ了はる去年と同じ無地のネクタイに

十六夜の月の光りの窓閉めてつひに母屋へ帰らむとする

密の実

東京 今泉 由利

肌色の密の種の弾け飛ぶ私の床をころころと

なぜ故に毒をもてるか密の実机上きじょうに弾け種を飛ばしぬ

それぞれの木々に等しく野分すぎ緑増したり林試の森は

水滴の一粒一粒大集合かくも大きく濁流をなす

アルフォンソマンゴジュースを朝な朝なその都度思ふ地球のことを

ブドウ科の貧乏かづらの橙の花托の色よあまりにも好き

一つ野分二つ野分の狭間にて真白真白しジンジャーの花

多摩川の源流近し紫ピンク釣舟草の花に近付く

けもの道おずおずとゆくおずおずとレンゲシウマの気高さに会ふ

描かむよ釣舟草に寄るときにトラマルハナバチやはり来てゐる

仏門の君

豊川 弓谷 久子

父恋し母が恋しと虫の音を聞くと言はれき静誠様は

産れてすぐに母逝たりと身の上話語り呉れにき浄願寺庫裏

仏門の君の一生を偲びつつ今夜は庭の虫の声聞く

赤とんぼ舞ひゐる道を歩みをり八十八の我が誕生日

おめでとうとみさとがくれしバラの花バイト料にて買ひてくれしか

雷鳴の中を産婆に走りしと父は語りき我が生れし日を

赤々と彼岸花咲きぬみのり田の中の畦道只赤々と

浮かび来る面影すべて野良着姿百姓なりき父母の一生

白菊を供華にともちて子と孫と山門くぐりぬ明日より彼岸

中秋の名月仰ぎぬお団子も薄も無けれど心満ちをり

好きな事

新城 青木玉枝

夢さめて呼び続けたるは誰の名か思ひ出せずまたウトウトと

歳古ればまして田舎の独居は侘しすぎて反省ばかり

暑き夏もそよそよの風に秋迎え紅葉の山並樂しみて待つ

独り部屋口をきかねば一日中好きな手仕事私は嬉し

編物ぬり絵ちぎれ絵と私は一日好きな事して

草原に玉露光りキラキラと今日の始まり窓辺より見て

老いて知る季の流れを背にうけて今宵十五夜中秋の明月

曇空今夜は名月見れるかしらせめて一刻大空に祈る

去りしつばめ軒の巢箱に帰る日を待ちつゝ冬への淋しさも知る

残り世に夢も希望も消え去りてひたすら仏の夫に祈りを

種取り

豊川 内藤 志げ

傷みなく三つ四つと真白アララギよりのわがダチュラ
幾年を過して曲りし小指なり手術の後のリハビリ痛し

人参の畝間を尽すスベリヒユ二つホコリハココベラといとも小さし
なよなよの蔓に一つの糸瓜を残す蒔けると信じ種採り用なり

種採りの一つ糸瓜は細き蔓棚に下りて黄緑にゆるる

ほづれなく太き線なす雲一つ竹のそよぎのそ上にあり

媪よりあんたの体は傷み茶碗大事にせよと言はれ五十年いっとなせ
漸ようやくにわが手に生姜洗い終う今から作る生姜の紅漬

カンランの畝間を溢れ道までもまだまだ止やまぬドシャ降りの雨
大型のトラックの間にわが車クラクテ滑るか坂を登れず

三差路について動かぬわが車クラクション鳴る国道二三号線
連らなれる車の間に寄りくれる孫より若きは一一〇番を

現代の世相

岡崎 林伊佐子

ふる里も廢墟となりて変貌する現代の世相を寂しく思う

集落をいくつも越えて辿り着くわが古里は過疎の僻村

竜胆の紫の花この年も木もれ陽あびて山路に咲き継ぐ

帰省して空家ならびて残りいる人の住まざるは生なき如し

遅たくましく蔭日向なく働きて瓜も背中も丸くなりたり

汗にくもる眼鏡をふきつつ今日もまた秋の野菜の苗を育てる

茜さし沈む夕陽を背にうけて今日一日の農仕事終へぬ

「寒狭川かんさがわ」を出版してより詠みし歌第二歌集の夢は果てなき

慣れぬ手に血豆を作り植ゑし杉五十年を経て幹は肥えたる

畦道に沿ひて咲き盛る彼岸花咲き連なりて墓につづけり

夫と来て父母のみ墓におはぎ供へいま祖父母たる幸せを告ぐ

稲の花

豊川 安藤 和代

今さに飛び立たんとす鷺草の白冴えて五羽が軒下に咲く
細き足しかとふんばり庭石に生きた証よ蟬の脱け殻
早生の田に水増す音の高くして小さく揺るる稲の花見ゆ
庭石の間に何ぞ急ぐ事あるや蜥蜴は特急で過ぐ
夏休み終り間近かよ宿題に追わるる孫のサルビア赤い
若き日のツーショットの写真枕辺に飾りて夫は昼寝の長し
夫も吾もこんなに若き日もあつた孫は二人を信じがたくて
金柑の花散りし後けなげにも米粒程の実がのぞきいる
冷奴焼き茄子そうめん大人気猛暑やわらげば焼きそばも良し
草蔭に憩うバッタの涼しげな細き瞳に空を写して
いなご取る幼き日びをなつかしく稲穂垂れゆく道に歩を止む
椎茸としめじえのきと釜飯の夕餉の部屋は秋がいつぱい

ニオイザクラ
東京 足立 晴代

十五夜の月何れにと見上ぐれば薄炭の空雲もなく

荒れ々々て災全土に広がりて黄金の畑も泥沼となりぬ

敬老の祝いて集う友人に紅白の菓子配られたり

道真公遺徳忍びて詩舞まいて秋の夜すがを過す楽しさ

秋の日の和らぐ陽ざしむくげにも光明るく白々と咲く

年たずね同じと知りて親しさも増して花咲く昔の話

過ぎし日の銀座を深く知る人と話弾みて楽しきひととき

永生きもほどくと思う日々友人知人の別れ悲しく

そこはかとなき涼風に秋のおとづれす、きの穂なみ

敬老の日娘よりの花鉢は秋に咲きけりニオイザクラと

北富士の

沼津 鈴木孝雄

日がくれて公園通る帰り道コオロギクツワムシ大合唱

北富士の演習場のススキ原どこまで続く富士山に至る

リニア線生きいるうちには乗れないと見学センター走行を見る

巨峰の誕生地から栽培地に見事な房の下がる勝沼

狩野川の堤に響くマツムシの音赤い三日月沈み行き行く

彼岸花この秋早めに花が咲く極端気象は想定外か

メビウスの輪白隠さんは命名前すでに禅画で表現をせり

潰せども潰せども現れるナスハムシ無限など無い今日も捕殺

切り取って放つたらかしたニラの花芽枯れることなく花を咲かせり

健診でコレステロールに異常あり好きなラーメンしばしお預け

百日草

春日井 清澤 範子

隣の家は子無くしてこの吾に留守頼みて海外へ発つ

百日草ようやく咲きし赤き花七宝焼きの花瓶に挿しぬ

喘息の発作の起きぬのどの違和感早速医師は点滴の指示

十日間の点滴に娘は付き添ひてやさしく吾を見守りくるる

吾が腕の血管細く看護師は小児科より来ましたと針細く替えぬ

三十分の点滴に十日付き添ひて娘は笑みて吾を励ます

諸草は刈られし後にまた伸びてつたは電柱に添ひてゆらげり

夫も吾も足腰痛み菜園も秋の虫の宝庫なりけり

里いもの堀り残しある菜園に葉茎大きく露持ち光る

日照り続き歩きなれたる堤防の水はひそかに流れゆくなり

秋風が吹く

大阪 伊藤忠男

秋風に恋芽生えたり寂しさのひとしおなりや長月の夜

降りしきる雨を眺めて物思う季節は早しもう神無月

宵闇に紛れ涙をぬぐい取る悲しみほんのつかの間なれど

窓開けて合わす鼻歌虫の声夜を楽しむこれも秋かな

長雨も日ごと日ごとに秋らしく虫鳴く声も勢いを増す

コオロギの鳴く声聞こえどここで鳴く居場所を探すこのごろのこと

沈む陽の早くなりたる長月の夜は夜とて朝が恋しい

ちよい遅れ台風一過青空も悲しニースに心が曇る

だれ付けたスーパームーン漫画風宇宙の神秘軽く見えるや

また来る一つ歳取る神無月何事もなくまたも過ぎ去る

国勢調査

東京 富岡 和子

小すずめも急ぎて幹へ俄雨黒雲見あぐ暫しの二羽は

矢羽根の葉すらりと伸びてすがすがしお隣り小庭おもい入れあり

カーテンを茜にそめて涼風がスーパ調え夕餉の仕度

金魚売り昔風流リヤカーにいま行列のアクアリウムに

五ツ六ツ大小あるも石榴の実若木初生り親木の脇に

秋祭りしるし半纏外人も御神酒おみきさづかり出陣の雄

薫風に祭り片付け成果あり青空のもと木犀香る

新しき街の発展二子玉川園いざよそ国と婆々らのお成り

ネットへと国勢調査今期から黒デンワ族の先が心配

葡萄園撓に実る房のした誕生日のランチ楽しむ

花芙蓉

東京 森岡陽子

白鼻心二匹揃ってウロウウロと秋の月夜に道行を楽しむか

定例の町内会のバス旅行挨拶するは何処に住むの

車窓より鋸山の崖を登る五つの瓜坊並んだおしり

房総の黄色で一両いすみ線路肩は芒無人駅走る

お雛子の三味の音ねにのり二ツ目さん羽織り自慢に堂々高座

秋の蝶客と一緒に門入る挨拶もなし土産も持たず

山裾に布袋葵の花の群登山道に心和ます

今宵咲く紅紫と白色の萩は枝垂れて風にゆるゆる

咲き初むは義姉の名の入る花芙蓉今朝の青空偲ぶあの時

秋出水屋根で助けを待たず夫婦胸にすっかり犬を抱きしめ

お誘い

名古屋 近藤 映子

時習館六回生八十路を結ぶ同窓会の知らせとお誘いのあり

父逝きて吾も病みたりこの何年わが娘ひたすら付添いくれたり

我右手まひ残りゐて毎日の動きに吾を悩ませり

右の手の痛みは休無くつづき四十度の湯舟の中の一瞬

長月と言えども一日が何も出来ず短かく思ふ日一日の

痛む手を何とか使いゆっくりの生活全てにいらいらとして

出来ない痛いと言いつつもゆっくりお箸使う嬉しさ

長月の中葉なれば彼岸の近し仏花水替へ朝の一瞬

秋彼岸の墓参り無事に終へ吾八十歳の誕生の日よ

彼岸過ぎ朝夕涼し油断すな一枚羽織るこの一手間を

引馬野の詩

豊川 白井信昭

朝々の涼しいうちに散歩せむ犬と出合わぬ道を選びて

用水の流れは深き夏の音田の面にはやも穂の出でてをり

エンジン音全開にして刈り払う兄は淡天の農道を選びて

明日は雨今日しかないと意を決し土留めの柱を生け垣に立つ

LEDの光の中に金色の粒大きくして猫の瞳

ヤモリ来て厨の出窓に腹を見せ直ぐに手足はびつたりと付け

猫クウは窓のヤモリに目を凝らす矢を射るが如く米櫃こめびつの上

み社の白砂青松に遊びにき幼日の記憶蘇りくる

母の引くりヤカーの桶後押しき境内横切る宮下への道

境内に今は亡き師の千年碑引馬野の詩時うたにみ回る

孫の香奈

新城 半田うめ子

やさしさの小林あきさんいづこかへ行きてしまふ淋しきことよ
やさしさの孫の加奈今日も又夕食をもち来る楽しかりし
孫の香奈東京にて買ひて藤原の本と言ひつつもちてきたりぬ
西川の川辺を歩く白き鳥数羽舞ひて楽しみ眺む
数ひきのとりの猫我のへに時折り来たりて遊びてゆけり

味見

横浜 阿部 淑子

太陽に真向かい咲きしひまわりは種子の重さに府うつぶせており
各地での洪水画面見続けて久々仰ぐ星のまたたき
極端な気象におののく時を経て小春日和に彼岸花咲く
蝉の声いつしかやみて淋しきに満月の夜はこおろぎにぎやか
根菜をコトコト煮込み香り立つ夫の味見で我は満足

美味しい

蒲郡 杉浦恵美子

古ぼけしネルに包まる湯たんぽは我が誕生時買ひたるものらし
箱書きに昭和二十五年購入と母の筆跡古びし湯たんぽ

湯たんぽを今後使ふことあるまいぞされど捨て得ず母を思へば

陶製の湯たんぽひとつ棚に戻し片付け意気込み頓挫しにけり

友人は居る方がよい強く思ふだつてこんなに懐しいなもの

このショック訴ふる人居ぬことが我が憂鬱を深めてゆけり

釣りなどに興味はないが海面を鰯が時折跳ねるは愉し

三河湾その内側を一巡り我が人生はかくてありけり

六十一歳主は居ぬが祝いたい寿司屋に行こう夫の誕生日

美味しいと感じる度に夫想ふ今のわたしの幸せなのです

葡萄

豊川 山口千恵子

一粒に一個は種の入つてゐるわが家の葡萄みづみづ甘し

一人生えのフウセン葛の実りたり種のハートの模様もたのし

垣にからみフウセン葛の風船のうすみどりの実あまたつく

人の手に植ゑられ畦道を彩れる彼岸花の列赤鮮やかに

葉に一つ尖れる物見えてをり月下美人の遅れたる蕾か

点蒔きに青首大根の種をまく短き畝うねの出来上りたり

点々と芽生え来たりぬ大根の二葉のあをのみづみづと見ゆ

コオロギが家のどこかで鳴きてゐる聞きゐていつしか眠りたるらし

ハンカチを一枚使ひて縫ふ袋見本に作るをまかされにけり

わが思ひそのままの話と読みにけり童話「でんでんむしのかなしみ」

落柿舎(2)

豊川 夏目勝弘

清滝の清き流れにたつぷりと汗を含ふみしタオルを浸す

岩場なす岩は幾千の人人の通りて出来し自然歩道ぞ

蛇行する流れの片辺の砂場に立ちて責めくる暑さを逃がす幾くたび

淵をなす流れを被へる赤松の幹の朱の色とみに冴えたつ

赤松の細細の青松葉散込む刹那我也見たしも

辿りつきし上清滝に食堂と問えばないよのたつた一声

高雄への四キロ余りを登り行くは若きカップルいと多くして

古い人は帰るのみとバスに乗る京都の駅は外国ならず

新幹線は常に3号車のトイレの近き席心おきなくビールが飲める

嵯峨野より上清滝まで歩みきぬ今日は一回もトイレにゆかず

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

今日もまた朝に夕にと聞こえる木魚の音よ君叩くのか
ポストまで炎天の下日傘さし暑中見舞を出しに行くのよ

山崎 俊子

施餓鬼会に法衣まとひて八歳の跡継ぎ坊様の仕草のけなげさ

名残り茄子ひとり食べつつ思ふかなかの一昨年おとしの夫と食みしを

三田美奈子

わが孫の漢検定受かりて大はしゃぎ今日は祝ひのイクラを五皿
惨状を残す写真のかの二枚ああ原爆忌八月六日

水野 絹子

台風は日本海へとぬけたるに未だ強風のただ中にあり
盆過ぎの風の涼しさ感じつつ独り行くなり今日も畑へ

牧原 規恵

子や孫の皆帰りたる昼下がりに何するでもなく紅茶を啜る

今宵観たる「火垂の墓」にまた涙戦後七十年のこの夏の想ひ

稲吉 友江

淡々と歌詠む茂吉のテープの声しみじみと聞く茂吉記念館に
わが漬けし小梅そろそろ漬かるかも今年も二人カリカリの音

鈴木美耶子

盆供養うから十五人集ひたり今宵の宴いと賑やかし

亡き父母の遺影の前に姪二人も会はせたまへる今年の盂蘭盆

吉見幸子

雨ふるに何かプスプス音聞こゆあわが家の電線に花火

海よりの塩の積りし劣化とかやうやく電線の工事終りぬ

牧原正枝

終戦からもう七十年思い出す国民学校と呼びし時代を

車の中会釈してから数分の後に浮び来その人の名前

岩瀬信子

満開の百日紅の花咲き散りて地蔵の頭にその掌の上にも

空襲の炎逃れて濠ほりの中水につかりし今の我あるを

石田文子

窓あけて眼とじれば涼しき風わが家の古家も露天風呂の如

叔母夫婦の施設の部屋に集ひたり母も揃ひて弾む茶和会

森厚子

現代学生百人一首

東洋大学

しつかりと的を見据えて放った矢静けさ破る中的の音

吉祥女子中学校二年(東京都)

山路 英

届いたよ祖父の思いがつまってる秋の楽しみ小さな柿が

星美学園中学校二年(東京都)

角田 恵理

都会ではスモールサイズの夕焼がパノラマになる山あいの秋

早稲田大学高等学院中学部二年(東京都)

山崎 拓実

自動ドア近づくだけで開いちゃう君の心も開かせたいな

東京都立鷺宮高等学校一年

風間 咲希

たくさんの色を混ぜると黒になるだから何故か身近に感じる

東京都立鷺宮高等学校一年

林 奈都生

「暑いからまた気をつけて帰ってね」優しい言葉聞いたコンビニ

東京都田園調布高等学校三年 武藤詩織

二人きり工場の中向かい合いひと夏過ごしたガス溶接と

東京都立府中工業高等学校二年 岡田大和

時を経て顔ぶれ変わる盆踊りラムネの味は少し寂しい

東京都立府中高等学校二年 新井美鈴

母ひとり愛してくれた十五年母を支える人になりたい

駒込学園駒込高等学校一年 蟹江亮仁

日暮れ時あなたの伸びた影法師ばれないようにこっそり影踏み

星美学園高等学校一年(東京都) 福田柚子

私の一首

ビルの群なき山里の素晴しき日本家屋に住むは老人

青木玉枝

山里に来て一番^{オドロ}驚いた事は山並を背景に立派な日本家屋に都会では見られない風景にこんなまだ美しい村が私の残り世の生活の日びと本当に嬉しさと安らぎを覚ええました。

若い中に都会に出て晩年を静かに山里に暮す若人をうらやましく私も残世送らせてもらう幸福を感じました。朝日に山並の映ゆる美しさは私の楽しみの日々です。

薄緑アブラムシを手で殺す指がすべすべ語源納得

鈴木孝雄

無農薬野菜作りにとってアブラムシは厄介な虫だ。窒素肥料過多にならないように努めているが、この虫から完全に逃れる事は難しい。

レタス類に付いた茶色のアブラムシは水で洗い流している。トマトに水を掛けることは避けたいので、薄緑色のアブラムシは指で一匹一匹潰している。しばらく作業すると、指に油を塗ったようにすべすべになる。アブラムシ名の由来を実感して読んだ。

新鮮な朝の空気を吸いながらひとり楽しむ山の散策

林 伊 佐 子

ふる里は、蓬萊寺山の西北にある小さな集落です。排気ガスの多い町の生活とちがって山の空気は冷たく新鮮です。帰省すると山の散策に行きます。四季の野花が咲き継ぎていることは、嬉しい事です。

自然相手の単純は詠み方ですので、もつと奇知きちのある歌を残したいと思っております。

忘れごと増るばかりで日が暮れる亡母口ぐせ「すぐやる課」です

富 岡 和 子

全くの考えなしに未知の世界アラギのお仲間。提出のたび恥かしい。と三年の月日を送りました。これは三年程昔のこと。東京近県の市役所に「すぐやる課」が出来新聞などで話題に。母の年齢は古稀ぐらい。いたく気に入り連発し良く働きました。生家を守りたく、主に畑仕事などし、大変よ不便な所で20年程ひとりで住み92才にて大往生いたしました。

私はイマ喜寿の年。その時代と母がなつかしく思い出されます。

食卓の夫の椅子の背手垢さへ契機となりて涙零るる

杉浦恵美子

先日ある方から「あなたの歌は哀しい」と言われました。確かに夫を亡くして以来の詠歌の核はどうしても夫への想いになり、それは必然的に挽歌の体となります。しかもその時時の感情を率直に表現してしまうため、直接的過ぎるのかもしれませんが。しかし四年前のこの作を見返して、今は当時の心境を穏やかに振り返れていること、即ち漸く哀しみから脱却できているらしいことに気付いて、こんなところにも歌の功用を感じたことです。

億年を石と化したる鬼やんま出逢えましたね睨めっこする

今泉由利

歌を詠む…何をするにあたって、大切なのは個性を素直に表現することだと思う。この世の一番はじめはど
うなんだろう…。気になって仕方がないから、太古の本物の恐竜展に馳せ参じる。花形恐竜達の会場の隅っこに
今のトンボよりずっと大きなトンボが化石となっていた。トンボの大きな目と私の目とあって！億年のへだたり
を遊ぶ。

季語のもつ深さを知りし旅なりき月ヶ瀬の梅の下ゆける日近し

夏目勝弘

伊賀上野の街を城址を巡ぐるも、忍者のみが目に付き、俳聖といわれた芭蕉の気配を感じることが出来なかった。伊賀上野を出て江戸へ、そして旅の生活で伊賀上野に帰って来てもまた旅へ。

芭蕉の故郷への思いは、伊賀上野ではなく家族のみであったと思われる。そんなことを思いながら帰ってきた。芭蕉の俳句における季語のもの深さを少し知ったことでよしとした。

高雄山の朝の靈氣に今一人聲なき聲を感じてゆかん

夏目勝弘

京都は観光地ゆえ雨の日を選び高雄山神護寺にきた。思った通りまだ一人の観光客が来ていない。

受付の若僧と話をしながら汗を治め息を整え、ゆっくりと山門に入る。

明恵上人が修行したこの山上の聖地を、目で見るのではなく感じようとうと、ひたすら心を空しく、ゆっくり歩んだ。

だれに気兼ねすることも無く、広い山上の境内を歩いた。ただそれのみの一日であった。

『俳句』

秋うらら五百羅漢の耳朶豊か

松本周二

病む妻の裸尖る夜長かな

荒廢の禪寺哀し法師蟬

すべりゆく秋の彼岸の渡し舟

山元正規

石段で登る山門竹の春

鎌倉の町をちこちの竹の春

夕月を独り占めするひとり酒

今泉由利

昆布締めのかき食べ頃新走

草々に色なき風の吹くことよ

一休禪師住みし庵や竹の春

川井素山

妙高の嶺より暮れて秋灯

芒穂に流るる芋煮鍋の湯気

二胡の音に歌声和すや敬老日

小柳千美子

梵鐘の響き広ぐる刈田かな

櫓田や寺荒れ果てて五輪塔

台風や撓みし壁の日本地図

重野善恵

枝豆を茹でる匂ひに夫想ふ

今年竹切るは時期よと主かな

かたはらに和み地蔵や竹の春
十字架の墓標に白き曼珠沙華
菊供ふ顔のくづれし道祖神

田 中 清 秀

さやと揺れ雀とび出る竹の春
筑波嶺の頂に消ゆ流れ星
此岸より羅漢に合す秋彼岸

森 岡 陽 子

流鏑馬の的中音や天高し
メトロ出てビルの狭間に今日の月
霧雨に山影あはく消えにけり

山 迫 京 子

この星をしつかり掴む今年竹

柳田皓一

降り続く雨脚太し竹の春

秋の雨歳時記めくるひと日かな

微風に芒の若穂皆揺れず

和田勝信

出雲路に行けども続く竹の春

秋雨の土蔵の壁に浸み出づる

カーナビに逆らひてゆく秋の虹

植村公女

背の反りの程良きがよし瓜の馬

愛用の小筆一本秋柩

かさね吟行会

「目黒・林試の森公園」 九月

田中 清秀 吟行記

山元 正規 選句

台風一七号と一八号の影響で関東周辺は希に見る大雨に襲われた。特に茨城県常総市は鬼怒川の決壊で多くの地域で甚大な被害が発生した。その翌日平成二十七年九月十一日、かさね吟行会は目黒区と品川区に跨がる都立

「林試の森公園」で行われた。まだテレビではその報道が盛んに行われていたがこの地は鬱蒼とした森林と草木に覆われたのどかな別世界である。最寄りの東急目黒線の武蔵小山の駅から地元の会員の先導で近道を進み十分足らずで到着、早速園内の散策を始める。子供連れや小学生の遠足、ジョギングをする人など平日にも関わらず園内はますますの人出である。

駅よりの路地の近道法師蟬

正規

ぬかるみに深き轍や野分後

文彦

この公園は旧林野庁林業試験場の跡地で大部分の樹木はその時より育まれたものでケヤキ、クスノキ、プラタナス、シラカシ、ポプラなど数多くの大木が見られる。また、外国産の樹木やアベマキ、ハナガガシ、ニオイア、口など国産の珍しい木々が様々な場所に生い茂っている。雨上がりで泥濘みのある歩き辛い散策路を行くと頭上で法師蟬が今年最後の大合唱、また、秋蝶がゆったりと木々をすり抜け爽やかな風が頬をなでる。「秋」はもう間近である。

手に重き雨の名残の木の実かな

千美子

一葉の虫喰ひ穴の楓かな

清秀

曼珠沙華は不思議と秋の彼岸に咲き揃う。仏教では伝説上の天の花、彼岸花と呼ばれ一茎の頂端に鮮紅色の数個の花を開く。すでに池の近くにはまつすぐな花茎が数本伸出し彼岸の近づきを感じさせる。暑さ寒さも彼岸までの諺が有るように秋の彼岸を境に涼しさがまし過ぎやすくなる。

直立不動蕾を伸ばす彼岸花
花散りし萩に残れる雫かな

京子
素山

雨上り今ぞとばかり法師蟬
法師蟬高みにありて鳴き尽くす

皓一
清秀

公園の近くには日本三大不動の目黒不動尊がある。ご本尊は慈覚大師が彫ったと言われる秘仏の不動明王が本堂に安置されている。不動尊は江戸城の鬼門の方向に置かれ庶民を災危難から護っている。会員の幾人かが改めて護国安泰、健康祈願などの参拝に向かつて行った。

青空に不動参りか赤蜻蛉
ほんのりとしきみ香れる神の苑

陽子
由利

句会場は隣接する不動住区センターで行われた。囁目三句出しいつも通りの披講選句とすすむ。今回は気負わず素直な俳句が多いとの講評があり順調に早めの閉会となった。終了後は恒例となった懇親会を駅前のレストランで開催、再評価と反省・お酒の勢いも手伝ってよもやまの話に盛り上がる。

公園は東西七百メートル周囲二・三キロと細長く面積は十二ヘクタールあり、六の広場が「ふれあいの径」で結ばれ暫し都心にいるのを忘れさせてくれる。昼食は持参のおにぎりやパンを皆で揃って園内中央にある六角堂近くのベンチで済ませる。池面にはカエデやブナの木洩れ日が映り、亀の甲羅干しを柔らかく包む。のんびりとした中にも各自作句の構想に頭をひねる。

■かさね吟行会■

日時 十一月十三日(金)

場所 駒場公園

集合 駒場東大前改札口(井の頭線)

十一時

申込 森岡陽子宛(03)3712・2835

『酔いの徒然』（四三）

丸山 酔宵子

圧巻で、ウクライナの首都キエフから南へ500 kmほど行ったヘルソン州で撮影されたそうだ。因みに、ウクライナの国花はひまわりなのである。

『ひまわり』
真夏の灼熱の太陽に、堂々と花びらを正面切って曝け出しているひまわりの姿は、凛々しいとともに健気さと寂しさも感じられる。

『ひまわり』と言えば、何と言ってもソフィア・ローレンが主演した名画を思い出す。監督はヴィットリオ・デ・シーカ、音楽を「ティファニーで朝食を」や「ピンクパンサー」などで知られるヘンリー・マンシーニで、日本でもソフィア・ローレンのグラマラスで妖艶な魅惑で大ヒットした。戦争によって引き裂かれた夫婦の行く

末を悲哀たつぷりに描いた作品で、劇中幾度か登場する地平線にまで及ぶひまわり畑の美しさと、もの悲しさが

世界的に広がり、日本へは17世紀にもたらされて、現在では北海道から鹿児島まで広く分布している。メジャーリーガーたちが、バターボックスやベンチで、『ベッター・ペッツ』と唾を吐いて食べているのはひまわりの種(Sunflower Seed)。ひまわりの世界的種子生産量は、食用油用原料として、大豆、菜種、綿実に次ぐ4番目の生産量があるそうで、多くはマーガリンの原料とされるが、サンフラワーオイル(Sunflower Oil)として不飽和脂肪酸のリノール酸が豊かで非常にバランスのとれたヘルシーフードなのである。

そこまでヘルシーであるならば、ひまわり或いはSunFlowerSeedで出来た酒は無いかとインターネット

で東西古今をチェックすると、唯一、「本格焼酎 向日葵」（柳川酒造 福岡）があった。残り8本との表示で、早速注文。先ずストレートで味わってみると・・・太陽を一杯に浴びた干からびた味で、テキーラをマイルドにしたテイストである。悪くは無い・・・ではロックで・・・

「閑話休題」。

実は、35年ほど前、鮮やかなひまわり色のツーピースをセクシャルに着こなした生ソフィア・ローレンが、大阪梅田旭屋書店での自著『ウーマン&ビューティ』サイン会に突然現れ、将に目の前に・・・。

スクリーンでは豊満なボディを惜しげもなく露出し、限りなく肉感的であるが、生ソフィア・ローレンは思いのほか背が高くスリムにさえ見える。しかし、その妖艶な眼と男を蕩けるさせるような唇は健在で、今でも思い出すと「ゾクゾク・・・」とそのオーラが甦る。

ソフィア・ローレンが動けば多くのファンと野次馬が「ウオー、ワー・・・」と歓声を上げ動き出す。と・・・

どういう訳かこちらをじーつと見ているような錯覚か、自己満足か、自意識過剰か、「・・・ドキ、ドキ、ドキ・・・ヤバイ！・・・何か感じる・・・」これは本当に、本当な出来事なのであります。

向日葵が只管愚直に陽に向かふ

酔宵子

ある自然科学者の手記 (42) 大橋望彦

『身の修まり』

若松へ帰ったのは、昨日今日と思つて居る内に、月日に閑守なく、早七年を過ぎ、明治十年私は十七歳の春を迎えました。四年前に小太郎との養子縁組が破談と成つて気軽な身となり、追々年頃となつてあちこちから縁談もありますが、帯に短し襷に長しで其の選択に、母は随分苦心した様で御座います。

伯母は、自分の腹を痛めた長男の久孝を養子と為し、私と嫁はせ度と頻りに願います。母は、余り進みませんが、再三再四歎願せられますので、東京の祖父小野権之丞へ相談致しますと、之も同意致しません。

他に親戚も在りませんから、土屋の叔父の所へ参つて、意見を聞いても小太郎の時の経緯がありますので執りあつてくれませんが、怖い顔をして其れを勝手に決める様なら、金輪際叔父姪の縁を切ると申します。気丈な母の事故『左様なれば致方御座いませぬ。暫く御目に掛かりますまい』と、言い残して別れたそうで御座います。

伯母は、久孝を鈴木家に入れ、三日でもよいから同居が出来ます様にと、山神様へ虎魚を供え、断食して祈願した程の熱心さで御座います。之を見て、母も心から同情致し、親戚

の不同意を押し切つて、久孝を養子にと決めたので御座います。

伯母の喜びは一通りではありません。然し久孝自身の考えもあろうからと、伯母は当時新潟英語学校に修行中の久孝の許へ参られ、相談の上本人も同意で、話が順調に進み、其の年の暑中休暇に狭いながら若松の我が家で、式を挙げる事に致しました。媒酌人は、誰をと迷いましたか、親戚は不同意の土屋様只独りしか有りませんので、西川半之丈御夫妻様に御願ひ申し、之で私の身は、漸つと修まったので御座います。

『終わりにあたり』

『光子』の自叙伝は此処までで終つて居ります。此のメモ便りの口述原稿は、筆者(大橋望彦)の伯父の鈴木威が祖母の八十歳の傘寿の代わりに編集したものが基となつて居ます。当時の状況をなるべく正確に反映させる意味で、所々現在では不適當な表現もあるうかと存じますが原稿に忠実に書き写しました。しかし、現代語では書けない表現では極く限つて、そなりの表現に変えた所があることお許しください。更に、鈴木威は、久孝の長男であります、未だ威の若年時代に父久孝が病死し、其の後御縁があつて、旧松本藩士大橋元成に後妻として嫁ぎました。従いまして祖母は大橋光子と成りました。其の後、長女茂登子・次女蓉子、長男不土夫、次男英吉と四子を儲け、夫々立派に成長致したので御座います。因みに筆者は不二夫の長男で御座います。

光子は、夫の元成が、旧松本藩士でありましたが、廃藩置県により、松本より上京し、官吏となつて、能登方面、あるいは当時の台湾統治政務次官の辻様の秘書的役割で、台湾に派遣されて居たことも御座いますが、その際も光子も同伴して、夫を支えて参りました。其の頃家作として数軒の家が、今の東京文京区本郷西片町に御座いましたので、其の一軒に大家として住い何不自由無く安穩に暮すことが出来ていました。然し、その後、元成の勤めの都合で青山に一時住まいを移し、其処で大正十二年の関東大震災に遭遇致しました。それでも西片の家作は焼けずに残りましたので、助かりました。元成が六十八歳の頃他界致し、其の後再び巢鴨の六義園の隣の地に移転し、私が生れたので御座います。父は渋谷区原宿の地にどうしても自分の家が建てたくて、西片町の家作も一切を売却し、原宿に西洋館の家を明治道りに面した所へ建築いたしました。其の家の一角少し飛び出した様な形で祖母の居室が出来ました。そこから日本庭園が見え、池には鯉や金魚が飼われ、水の改濠かぼらは私の仕事と成りました。此の八畳の和室の間は、床の間や神棚もあ、何よりも嬉しいのは、我が家に唯一のラジオが在った事でありませぬ。祖母は好くニュース、浪曲、謡曲、落語、それに芝居の番組を聴いておりました。『何が、何して、何とやら…』とか、『四条、五条の橋の上、行き交う人の、貴賤と卑…』とか、『ええ、毎度、馬鹿々々しいお話を…』とか言つた言葉は全て此のラジオのお蔭で御座います。

昭和十六年十二月八日の朝、『大本営発表、大本営発表、本八日未明、西太平洋上に於いて、我が軍は米英と戦闘状態に入れり。』と言つた放送も此のラジオで聴きました。もちろん祖母も此の放送を一緒になつて聴いて居ましたが、『戦争は嫌だねえ』と一言申したのみでありましたが、之には万感が込められて居たのでありませぬ。

此の家の明治通りを挟んで向かい側の家で、中松義郎ちゃんの家でした。今は、発明王として、また毎回都知事選挙に出馬しているの有名な方になりましたが、当時は私の一つ年上ですので、良い兄貴として、毎日、両家に跨り行き来して遊びました。

戦争も次第に厳しくなり、警戒警報のサイレンが、敵機が南洋上を北上して来る事が判つた時点で鳴り出します。其に従い、老人子供は、用意した防空壕の中に入って、敵機が上空に来るのを待つて居ります。愈々敵機が東京の上空に達しますと、空襲警報が鳴り、断続的なサイレンの音となります。この頃は、全ての人が、防空壕の中に避難する訳です。ですから、祖母はジイツと長時間、十ワットの裸電球の光りの下、薄暗いジメジメした防空壕の中で我慢していた訳です。戦争の初めの頃は、それでも原宿の辺りには、隅に爆弾が一二発落とされ、怖い思いも致しましたが、焼夷弾の様に火の海と成る事は御座いませぬでした。然し、戦争が激しくなると、次第に原宿、渋谷の間ですので、当然何れは焼夷爆弾で丸焼けになつてしま事は予想されました。

絹の話 (60)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹と光の波長

【人類の誕生と光】

地球の上空にオゾン層が形成されると、太陽から降り注ぐ光の中で、紫外線領域の200ナノ以下の波長の光をオゾン層が遮り、生物はやっと地上で暮らせる様になりました。それから生物は進化を繰り返す中で、モンシロチョウが黄色しか色を認識しない様に、各種生物はそれぞれ目の進化を果たして来ました。

人類は30万年前に類人猿から進化して現代に至っています。その間ずっと太陽光の下で暮らして来ました。その光は800ナノ(赤色)〜400ナノ(紫)の7色の色を見て長い間過ごして来ました。人の目はその下で物を識別しています。(まれにもっと複雑な色を識別出来る人もいるそうです)

現代人の視力は2・0が最も良いと云われていますが、アフリカなどで狩猟を中心に生活をしている人達は3・0以上の視力を持っている人も稀ではないようです。この人達は色の識別も2・0以下の人達と多少の違いがあるのではないかと思えます。

したがって、北欧、温帯、赤道直下の人達では色の識別に多少の差がありはしないでしょうか。

【新しい電球の波長】

日本では一般の人が夜に電球の光の恩恵に浴するようになってほぼ120年余り。前半70年はフィラメントの赤色(波長が長い)が多く含まれた熱を持つ電球でした。それから蛍光灯(水銀を塗ったガラス管が光る：波長は短い)になって来ます。デパートなどのベースの明りも蛍光灯になって来ると、買った洋服が家に持ち帰ったら色が違う、と云う苦情が後を絶たなくなりました。

一般家庭にも蛍光灯が普及すると、外で見た時と違った色に見えると云う苦情に変わって来ました。お客様の中には品物を外の光のある所まで持って行って色を確かめる人もいらっしやいます。外の光で見る色が本当の色であると信じているからです。太陽光の下で見る色が判断の基準になっているのです。昨今ではこの様な人は60才以上の方が殆どで、若い人には見かけない行動です。

年配の方の育つ頃は「子供は風の子、外で遊べー」と太陽光の下で物を見る目が育っていました。しかし現在の人達は蛍光灯やLED光源の下で携帯電話やスマホ、パソコンなどに囲まれた短波長の中で1日の大部分を過ごしていますので、デパートの人工波長に違和感を感じ

なくなつて来たのではないでしょうか。

特に太陽光育ちの私などは最新改装のデパートの化粧品売場の光には長時間堪え難いものを感じるのですが、若い人には心地良い環境と感じられるのでしょうか。太陽光で物を見て色の判断をしようとする人は今や少数派になつてしまつたようです。

やがては、怪談で幽霊の出る場面の色彩は怖くも恐ろくもない、むしろ好ましい色になつて来る日が来ないとも言えません。

デパートで波長の長い赤みを帯びたハロゲンランプを補助ランプとして設置すると、年配者に売上が伸びます。かなり遠くから絹の艶にひかれて誘蛾燈よろしく女性が集まつて来ます。不思議と男性は反応しません。

一緒にいる若い娘さんはお母さんが嬉々として品選びをしているのに無反応です。太陽光的長波長には反応しないのです。若い女性は光が乱反射して軟らかい光沢のある絹より、ギラット光るレーヨンの艶が好みです。

【草木染めはかじりかじり】

波長の違う様々な電球が出来るようになった現在、草木染めの様な自然光の下で善し悪しを判断して来た染色は、今後何処を基準に色を決めて行つたら良いか判断に苦しみます。

好ましい色、美しい色とは光波、光量、人種、地域、年齢、教養、時代等に大きく影響されるように思えます。現代日本人の多くには草木染めの穏やかな色彩が喜ばれていますが、近い将来、陳腐な色と思われる日が来るかも知れません。

その昔、奈良の大仏開眼会に集まつた万余の僧侶の法衣の色は目にしみる様な鮮やかな原色であつたと云はれています。人々はその行列を畏敬の念を持つて見送つた事でしょう。現代の私達がそれを見たら、いささか軽薄な感じがして如何なものかと思うかも知れません。

【光の波長と健康】

短い波長の光は長波長の光より高いエネルギーを持っていますので、破壊力も大きいのです。多孔質の野蚕絹は紫外線領域の短い波長の一部を糸の多孔質の中に吸収してそのエネルギーを直ちに熱に換えて放出してしまうのですが、人間にはそんな装置はありません。蛍光灯が普及して肌荒れや癌が増えて来たと言えないでしょうか。

LEDランプが一般的になつたらどんな事が起こつて来るか心配です。省エネと人の健康、感性保持とはイコールではないようです。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 五十回

「月虹」 鮫島 満

二十四 金子阿岐夫 2

時々には曼珠沙華咲く田のはたて近江蓮華寺の松山円
し 『黄の光』 昭和四十六年

紫に髪を染めたる未亡人請はるれば立つ茂吉歌碑の
前

作者が訪ねた近江蓮華寺は、茂吉の生家隣の菩提寺である宝泉寺の住職であった佐原隆応が大正八年に転じた寺である。この住職は幼い頃から絵や勉強を教えていた茂吉を東京の開業医齋藤紀一の要請を受けて上京させた人で、茂吉は恩人として敬い、近江蓮華寺に何度か訪ねていた。

二首目の「請はるれば」は写真を撮るために作者に頼まれたのであろう。また「未亡人」は隆応和尚の次の住職の夫人のことであろう。詠まれている歌碑は昭和四十六年に建てられたもので、「松風のおと聴く時はいにしへの聖のごとく我は寂しむ」（『たかはら』所収）が刻まれている。

朝な朝な霜深きころ茂吉先生は歌会に柿の題を撰び
き 同

茂吉が大石田に移居すると歌会が頻繁に行われるようになっていた。聴禽書屋で身辺の人たちで行う「聴禽書屋歌会」と、広く大石田内外の人たちが参加する「大石田歌会」とがあった。右の歌に詠まれたのは大石田歌会で主に大石田農芸女学校で行われた。板垣の〈随日記〉には、「今日の歌会に遠く狩川より黒沼みはるさんも来る。十一時開会、約三十名近く集る。三時頃までかかって出詠歌評を終へ、結城先生出題『柿』を三十分以内に作る」とある。「結城先生」とは遠く本沢村から来た結城哀草果のことである。「柿の題を撰びき」は、哀草果が題の候補を幾つか用意した中から茂吉決めたということであろう。この時、阿岐夫は「露深き吾が裏庭に柿の葉の散り乱れしを踏みがたくをり」と詠んでいる。

茂吉先生の歌碑の湿拓を採る父の腰痛を言へど樂し
げに見ゆ 同・昭和四十七年

題詞に「大石田に御墓並びに歌碑建つ」とある。茂吉の三基目の墓が大石田に建てられたのは昭和四十六年であり、そこに建てられた歌碑には「最上川の上空にして

のこれるは未だうつくしき虹の断片」(『白き山』所収)が刻まれた。この経緯については本連載「板垣家子夫」の項で述べた。

鴨山の歌碑の拓本を下さりぬむらある墨の色も親し
く
同

詠まれている歌碑とは、昭和二十八年に島根県邑智町の鴨山公園に建ったもので、茂吉の人麿研究に関わる「人麿がつひのいのちを終はりたる鴨山をしも此処と定めむ」(『寒雲』所収)が刻まれている。「下さりぬ」の主語は、隆心と茂吉のことを研究していた黒江太郎である。

月岡の落葉の厚くしめる道踏みのぼりゆく茂吉歌碑
まで
同

月岡とは上山市鶴脛町の月岡公園のことで、昭和三十六年に茂吉の「川越えし田こえしことも足乳根の母に連れられありにけむもの」(『あらたま』所収)を刻んだ歌碑が建てられた。

大石田に病み給ひしとき一夜わが添寝せしこともひ
とつ思ひ出
同・昭和四十八年

大石田で茂吉が左湿性肋膜炎で長く苦しんだのは大石田移居二ヶ月後の昭和二十一年三月から六月までであった。阿岐夫が茂吉に添い寝したというのは父・板垣の代わりに夜の看病をしたことをいうであらう。

春浅き大石田の茂吉先生の墓バンジーの花に囲まれ
てある
同

茂吉先生の歌碑立つ庭に雪ぐせに傾く木々のいまだ
芽吹かず
金瓶より貰ひて植ゑし白頭翁暑き春日の夕べ萎れつ

茂吉の第三の墓が建てられた場所は大石田町の乗船寺境内である。この歌碑については右に述べた。三首目の「白頭翁」はオキナグサのことで、茂吉が終生好んだ野草である。金瓶でも大石田においても野歩きの中で探し求めたし、歌にも詠んだ。右の歌で「暑き春日の夕べ萎れつ」というのは、これがまだ寒い春先に開花するからで、春の強い日差しに弱いのである。茂吉ゆかりの花を茂吉ゆかりの金瓶から移し植えたところにも大石田の人々の思いが読みとれる。茂吉は『白き山』の中で、「おきなくさここに残りてにほへるをひとり掘りつつ涙ぐむなり」「をさなくてわれ掘りにけむ白頭翁山岸にしてはやほろびつる」「われ世をも去らむ頃にし白頭翁いづらの野べに移りにほはむ」と詠んでいる。

楽しい時間 36

山本紀久雄

2015年9月30日

手仕事への回帰(4)

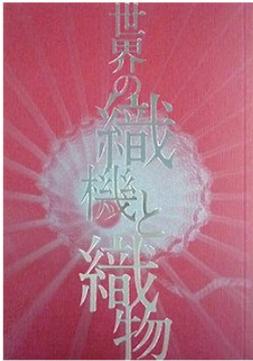
特殊性から普遍性へ

手仕事への回帰を、この四回目で終わりたい。終わるためには「世の中のセオリー」を述べなければならぬ。

前号で、吉本忍氏編著『世界の織機と織物』と、苧住昇著『最新樹木根系図説』が共通しているものとして「特殊性から普遍性へ止揚させている」と述べた。

吉本氏は、この『世界の織機と織物』で世界中の織機について調査し解説している。勿論、コザもワラジも織物であるから、その織り方を実際の織機と織手、その作業段階も詳細に書き述べている。現地・現場を調べ抜き、恐るべき緻密さで「これでもか」と見る人に迫ってくる迫力はすごい。

苧住氏の『最新樹木根系図説』も、歌人で



京都産業大学教授の永田和宏氏が「五六二種の樹木の根の細密な写生に圧倒された」とあるように、樹の根しか書かれていない。

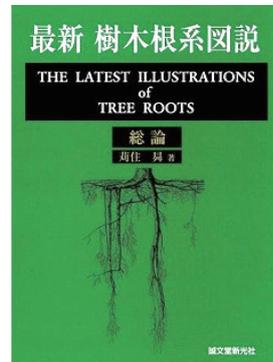
根は地中深くに潜んでいる。写生するためには、当たり前なことだが掘らねばならないだろうから、気が遠くなるような手間がかかっている。

吉本氏編著『世界の織機と織物』は4455円、苧住昇著『最新樹木根系図説』は8万円と価格は大きく異なるが、織物と樹木根に対する研究追求力量は同質である。

人が調べない分野、人が興味を持たない分野、人が気づかない分野、それに興味と関心を持って世界中を調査・研究して歩き回り、その成果を詳細な書籍にまとめる。

その分野で、その人しかいない特殊性の世界へ没頭した結果の書籍、それを手にした読者は、内容は分からずとも「ここまでやるか」という感動を覚える。

だから、この二冊は本の価値を高めるといふ普遍性の原則に合致するし、経営的に考えれば「人がしないことを追求した結果、その分野で第一人者になる↓他の追随を許さないレベルに到達する↓ライバルがない↓独占的地位を確保する」という圧倒的勝者になっているので



ある。

「手仕事への回帰」という意味

だが、吉本氏はここで終わらない。

最初に紹介したホーン・ムーンマン博物館の「むしろやゴザを織る原初的な織機の部品」、学芸員でも知らない物体になっていたが、これは「使われていない」モノになっていることを意味している。

今回訪れた東北タイの田舎各村、そのの織られている現場に入った時、吉本氏は「ああ、ここでも手作業から機械が変わっている」と口癖のように嘆き続けた。

つまり、手作業から機械化・省力化へとシフトしているのであるが、そこから吉本氏は人類へひとつの大きな警鐘を発する。

「今やわれわれは人類がこれまで経験したことのないきわめて便利な時代のなかで生きている。

しかし、その一方でわれわれは、いたるところで環境破壊を引き起こし、人類の文化遺産ともいえる手仕事によるモノづくりも放棄しつづけている。

今や木を削ったことがない、薪を割ったことがない、火を熾したことがないといった人や、包丁もまな板も使わないで日々の生活をいとんでいる人も急速に増えている。

たしかに現代社会は、便利このうえない時代ではあるけれども、自然災害は今なお世界中のいたるところで頻

発している。

自らがモノづくりをすることなしに、機械化によって大量生産されたモノが容易に手に入る生活があたりまえになってしまったわれわれが、手仕事によるモノづくりを放棄しつづけていることは、人類がモノづくりすることで日常的に培ってきた創意工夫をする能力を低下させ、自然災害でライフラインが途絶するというような非常時での生き延びる術をも放棄しつづけていることにはかならない」（序―手仕事への回帰―）季刊民族学 144号発行・千里文化財団）

いわば吉本氏は「織物の世界」から「人類に共通する危機」へ警鐘を導き出し、それを「手仕事への回帰」と名づけたのである。

人生とはどう歩いたかが問われる

吉本氏が「人類に共通する危機」という認識に至ったのは、どこからヒントを得たのだろうか。それは簡単に、織物の旅を通じて持ち得たのである。

しかし、吉本氏のように、あるテーマを探し求め続けたとしても、人類の警鐘レベルに達する人は少ないのではないか。「仕事」が金銭を手に入れる手段と考える人には、気づき得ない世界だろう。そうではない「仕事」をした人のみに「何か」がのこされていくはず。

そう考えると、人とは「仕事を通じて人生をどう歩いたかが問われる」存在だと思ふ。

楽しくマナー ⑤

辻 照子

「ワインとチーズ」

この講座は前期・後期があり、1995年頃より開催して継続して参加しているメンバーも多く、積極的に質問したり、話しかけてくれますが、あまり目立たない人にはこちらから声をかけるようにしていました。漏れなく皆さんのお声を聴きたいという思いで、マイクで「ひと言スピーチ」を10年位前から恒例にしました。初参加の人も含め全員、いろいろな話をしてくださるようになりました。今回はオカリナの演奏有り、笑いあり、感動の涙あり。。。「ここ」でのひと言スピーチで大勢の前で話すのに慣れ、他であまり緊張せず話せるようになりました！先生はお話をするとき、緊張しないのですか？」と質問。

マナー講座の講師をする前、企業（電機メーカーのコンピュータ事業部）に勤務していて、コンピュータ端末の講師として、社内や官庁や得意先のユーザーなど、年配の方や偉そうな人の前で、ちよつと背伸びをして講演をしていた最初の頃は緊張の日々でした。

のちに、コンピュータ技術開発研究の仕事で海外赴任をする夫に家族で同行し、各国に滞在中夫婦で出席しなければならぬパーティや、食事会で多くの種類のワ

インやチーズに出会ったり、テーブルマナーやコーディネートを見聞し、その経験をもとに生活を楽しくするためのいろいろな提案を、現在は緊張もせず楽しくお話ししています。

一般的にフルコースのデザートとしてチーズ、フルーツ、ケーキがサービスされますが、料理のボリュームによつては、デザートをお好みでチョイスする場合があります。まだチーズの美味しさに目覚めていない若い頃はフルーツやケーキを選んでましたが、今は迷わずチーズを選びワインとのマリージュ (marriage・結婚) を美味しく楽しみお食事の余韻に浸ります。

チーズの種類はワインと同じようにたくさんあります。フランスのマルシェ (marche・市場) や街にはフロマージュ (Fromage・チーズ) 専門店があり、たくさんの種類からいくつも買い求め、日常の食卓にワインとともに用意します。

代表的なのはフレッシュチーズ (カッテージ クリーム マスカルポネ等)。白カビチーズ (カマンベール ブリー等)。原料が山羊のミルクのシェーブルチーズ (ヴァランセ サント・モールフェタ等)。ハードチーズ (エメンタール ミモレット エダム パルミジャーノ等)。青かびチーズ (ロックフォール ゴルゴンゾーラ ダナブルー等)。ウォッシュチーズ (ボン・レバック ラクレット等) があります。癖のある青かびチーズや山羊のシェーブルチーズ、ハードチーズはフル

ボディのしっかりとした赤ワインと、フレッシュチーズや白カビチーズは白ワインやフルーティーな赤ワインと相性が良いでしょう。

チキンのハーブグリルとなすのマリネを調理し、ハーブチーズ（エメンタール）、青かびチーズ（ダナブルー）、シェーブルチーズ（フエタ）の3種類のチーズをボルドーのバロンドレストック（赤）と国産ワインのマスカット・ベリーア（赤）と甲州（白）とともに試食します。



*チキンのハーブグリル

材料（4人分）

- 鶏もも肉2枚 A（醤油大さじ2 胡椒少々 エディブルプロバンス大さじ2） にんにく2片
 - オリーブ油大さじ2 B（レモン（くし型切） 4切
 - クレソン・ラディッシュ あれば各適量）
- 作り方

①鶏肉は余分な脂を除き、皮に切れ目を入れAを揉み

込む、にんにくは半分切る。

②にんにくをフライパンに入れオリーブ油でこんがり焼き取り出し、鶏肉を皮目から入れ、両面を焼き、そぎ切りにして皿に盛り、にんにくとBを添える。

*ナスのマリネ

材料（4人分）

- ナス4本 青紫蘇10枚 オリーブ油大さじ2 A（塩小さじ2 水2C）
 - B（醤油大さじ1 ワインビネガー大さじ1 オリーブ油大さじ2）
- 作り方

①ナスは斜め1cm幅に切、Aに浮かさない様に入れ15分位して水気を拭き、フライパンにオイルを熱し、両面を焼きBに漬け込み冷やし、ちぎった青紫蘇を混ぜる。

*チーズいろいろ

材料（4人分）

- ナチュラルチーズ3種類 クラッカー12枚 パセリ適宜
- 作り方

①クラッカーにカットしたチーズをのせパセリを飾る。

「歴代天皇御製歌」(四十四)

貫名海屋資料館

『二条天皇』第七十八代・在位一二五八年(十六歳)―一二六五年(二十三歳)

二条天皇は、後白河天皇の第一皇子。この御代、さきの「保元の乱」に続き「平治の乱」が起きた。前の戦いで勝者の平清盛と源義朝との間に勢力争いが起きる。そして源氏の勢力が衰え平氏が全盛時代をむかえる。
二条天皇は、和歌を好み、内裏で百首歌や歌会をししばしば催された。

雪つもる嶺みねにふゞきやわたるらむ越のみ空にまよふ白雲

(千載 四五五)

百首の会の、雪の歌を詠まれた。越のみ空(北陸地方の古称)

空はれし豊とよのみそぎに思ひ知れなほ日の本のくもりなしとは

(玉葉 二一七七)

豊のみそぎ(大嘗祭の前月におこなわれるみそぎ)

(大嘗祭、天皇自ら天地に供へ、天皇も臣下も賜わる式典)

大嘗祭には、日本の国は曇るなどというようなことはない。

「歴代天皇御製歌」(四十五)

貫名海屋資料館

『高倉天皇』第八十代・在位一一六八年(八歳)―一一八〇年(二十歳)

高倉天皇は、後白河天皇の第七皇子。後白河上皇の院政がつづいていたが、平清盛の全盛期、後白河院が幽閉状態におかれ、高倉天皇自ら政務をとられることとなる。

後の建礼門院を中宮に迎え、安徳天皇、後鳥羽天皇の父。

法然が専修念佛を唱え、鎌倉佛教この頃はじまる。

雪つもる嶺にふぶきやわたるらむ越のみ空にまよふ白雪

(千載 四五五)

百首の会の、雪の歌を詠まれた。越のみ空(北陸地方の古称)

空はれし豊のみそぎに思ひ知れなほ日の本のくもりなしとは

(玉葉 二二七七)

豊のみそぎ(大嘗祭の前日におこなわれるみそぎ)

大嘗祭には、日本の国は曇ることなどない。

音羽山さやかにみするしらゆきを明けぬと告ぐる鳥の声かな

(新古今集)

落柿舎(2)

夏目勝弘

江戸に出て十年やつと深川に草庵ができた。その芭蕉庵も世にいう八百屋お七の火事で類焼し、甲斐の谷村に半年滞在した。

江戸の門人たちが芭蕉庵を再興してくれ安堵する間もなく、兄より母の死が、貞享元年八月、門人千里と深川の草庵を出発、近畿地方の旅に立つ、母の墓参を兼ねる旅。

○野ざらしを心に風のしむる身かな。

芭蕉四十一歳、全国的にも名が知られるようになり、本格的な旅が始まる。特に各地の農民・町民の俳人が旅の助けとなった。

西行を慕い、禅の修行で啓かれた心の眼は芭蕉の俳句が芸術の域に達してきた。

母の遺髪を手に（手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜）と一周忌をすませ、大和に赴き滞在し吉野の西行ゆかりの草庵で

○御廟年経て忍は何をしのぶ草

そして大垣の谷木因の家挨拶として、一句

○しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮

貞享三年正月を伊賀で

○旅鳥古巢は梅になりけり

熱田へ鳴海を経て四月下旬に芭蕉庵に帰る。

貞享三年三月、芭蕉庵で排席を開く、この句会で芭蕉の（古池や蛙飛びこむ水の音）がその後「蛙合」集で刊行。

その結果、多くの俳人から暗々こうごうの非難や批判が飛びかうも、これが芭蕉風俳句の開眼とされている。

貞享四年八月鹿島詣、高野詣、笈の小文、更科の旅を続け、元禄元年八月下旬江戸に。

元禄二年三月から八月まで「おくのほそ道」、九月下旬伊賀上野に帰郷。十二月二十四日落柿舎、四十六歳。膳所で越年。

元禄三年正月三日伊賀に帰る。そしてまた膳所、四月に国分山の幻住庵、いつたん京に出七月二十三日まで滞在。九月末に伊賀に帰り十二月京に、そして大津の乙州宅で越年。

正月上旬伊賀に帰り、四月十八日から落柿舎に滞在「嵯峨日記」を書く。

六月大津の乙州宅、十月十九日江戸に着き元禄五年五月に芭蕉庵再興され入庵。

元禄七年五月十一日故省の途に、二十二日落柿舎に前回までに巡れなかった所を巡る。

今回の旅は故郷での盆会をすませ、長崎への旅目的を果せず、最後の旅となった。

九月二十九日の下痢は前回のようには止まらず。十月五日に大阪の仁右衛門宅に病床を移した。十月八日夜中に吞舟を呼び書かせた。

○旅に病んで夢は枯野をかけ廻る と

翌九日の朝傍の支考に、落合での観月の折り野明に与えた「大堰川浪に塵なし夏の月」の句が気にかかり、心残りでならない。

「清滝や波に散込青松葉」と詠みなおす。生への執着から解き放たれ自由自在の境地となった。十月十二日臨終を悟り、朝食もとらず、香を焚き瞑想に入り、正午頃小康状態があり門人たちと、冗談をまじえての会話をし和やかなうちに息を引きとる。午後四時。

この十年時間をおしむかのように、命をちじめても旅を、なぜしたのだろうか。

美を司る神霊精霊たちの呼吸を感じるためなのか、禅の心境が魂を鼓舞させたためなのか、やむにやまれぬ心の騒ぎなのか。西行の跡を追い芭蕉も子規も多くの俳人歌人が旅をしている。百歳まで生きたのは土屋文明のみ。

自分も同じように追いつづけているが、今のところ何を得たかわからない、でも後生につづく修行しだと思っている。

「氷魚」のことから (178) 岡本八千代

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺 子規

今年も柿の季が来た。柿を見ると自ずと柿が大好きだった子規を思いだす。子規の糸瓜忌(九月十九日)も過ぎて一週間になってしまった。今、私の開いた本は、坪内稔典先生の「正岡子規の『樂しむ力』」という本である。(NHK出版の生活人新書) — その帯に「いかなる境遇にあつても樂しみの中に生きる」とある。

子規の入学した大学予備門は明治十九年四月に第一高等中学校と改称された。彼がこの学校を卒業するのは明治二十三年、二十三歳の七月であつた。そして、九月に文科大学に入学した。しかし、明治二十五年の学年末の試験がおもわしくなく、子規はまた、退学を決意して、十二月から日本新聞社に出仕したのであつた。この時機を通して、仲間と何かをするということが多くなつたといわれている。——たとえばベースボールに熱中したり、松山出身の学生たちが暮らしていた常磐会寄宿舎で「ボール会」を結成して、試合を楽しんでいたりした。彼は監督かコーチ気分であつたらしいと言われている。子規はベースボールについて楽しみ方は、

「二町四方の間は弾丸は徒横無尽に飛びめぐり、攻め手はこれにつれて戦場を馳せまはり、防ぎ手は弾丸を受けて投げ返しおっかけなどし、あるは要害をくひとめて敵を……」云々 などとして、いかにも血沸き、肉躍るよな楽しみ方であつたらしい。

彼は、自分の「升」を「野球」「能球」と雅号まで使つていたことは誰もが知つていたと思うが。

また、子規は、俳句や短歌、文章の革新を進めることにも熱中した。彼の文学観は、

「作者が面白いと思うものを読者にも面白くと思わせることだつた。」(P88)

つまり、短歌を詠む、創作するのは、自分の二首が読んでくれる人にも伝わるような作品にしてゆくことの大切さであろうのかも?。

また、子規は、友人たちにも点数表を作つたりして楽しんだ。寄宿舎の二十名をこす同級生が点をつけて投票。それを平均したものだ。

例えば、子規の点数は、

容色(78・1)、修飾(68・1)、色欲(79・5)、食欲(86・4)、胆力(70・8)、忍耐(74・6)、勉強(72・5)、才気(84・9)、のように点数化したりした。

才気を高く評価。低いのは修飾と色欲。修色とは「今でいうファッションか」P90

他にも「七変人評論」というのがあつて、七人が互いに「品行性質」を評論しあうものであつてなかなか厳しい意見が書かれている。

子規については、「才智はあるが、才子気取りはよくない」「胆が小さくて内弁慶であり、友人のあいだでは威張つたりするが、先生や大人数の前では猫の前の鼠になる」

といわれたりしたが、「後世、『文学ヲ以テ名ヲ上ぐる』と」期待されていたらしい。(次号へ)

ことのはスケッチ (443) 今泉由利

『天田愚庵』⑩ 年譜

○親を、子を思いう哀感

雛雀 明治三十五年 (一九〇二年) 愚庵四十九歳

親を恋ひ泣くか子雀久形の雨にぬれつつ鳴乎子雀

明治三十六年 (一九〇三年) 愚庵五十歳

子雀はこの降る雨に立ちぬれて親鳥呼ばふ声を限りに

○母雀

ふる雨を若葉の木ぬれぬれそぼち子の餌もとむる親雀かも

立ちすがり尾羽かきふる子雀を親をめぐしと餌とりくらしも

○武道試合、武徳祭歌、京都で試合を詠んだ。

細才千足の国の武夫の磨ける業を見らくし樂し薙刀

横になぎ縦にも薙ぎつ薙刀の長柄の手振少女よろしも

鎗術 (槍術そうじゆつ)

突き出す鎗の長鎗短鎗やりもすこしつ突ききもとどめつ

鎖鎌

右に撃ち左に掻くはくさり鎌首かきたりや音のさらさら

馬術

風にきほぶ甲斐の黒駒綱たたば空の上にも行かむ黒駒

丈夫はほろ引き流し荒駒のあし毛の駒に乗りつつぞ行く

命全く長く垂らさまく天地に折れもろもる摩訶般若波羅密

雪の下に竹は伏すとも冬籠り春たたむ日は起き立たむ日ぞ

○悼自侍庵歌

霊屋には魂はまさめどその人の目にし見えねば悲しかりけり

手向けむと手折りし花の露散りて形見の衣ぬらしつるかも

○贈子規歌

如何にして君はますらむ荒金の地さけて照る今日のあつさを

如何ならむ神の恵か我はしも今年ばかりは夏瘦せもせず

○古瓢を祐孝に遺るとて

天地の別る時の其姿かくしもあれやこの瓢これ

○年内に咲きたる梅を

梅の花咲けるを見れば打摩く春は来ねども樂しむかも

み仏に手向けしあとの梅の花誰にしやらむ君にしやらむ

秀枝をば仏に手向け下枝をば君に見せむと今朝ぞ手折りし

梅の花かざししあとは床の間の小瓶にさして猶しばし見よ

床の間に置きても飽かば朝日さす軒端にかざせ驚や見む

○伏水の観梅

大君は神にしませは呉竹の伏水の山を庭とつくらす

君のめでは広愛春されば御園の梅を民にゆるしつ

玉敷のみ庭にあまる春風に賤の園生の梅も匂へり

春の日の光を仰ぐ民なれば伏見の里と云ひならしけむ

物部の八十氏川に立ち向ひ咲けるか春のさきかけの花

○梅見後まかりて品川大人。

梅の花散りもはてぬに見し人の野辺のけざりと消えにけるは
や

かさねきて独り眺めつ梅の花昨日は君と見つめしを

○峯山禪師津送に

あたし野の露と消えても今更に空しき人と我思は^{わがも}なくに

○鶯歌（愚庵は鶯鳥を飼っていた）

諸越の文字かく聖（王義之）古に愛でけむ鳥ぞはしきこの鳥

○愚庵は上京すること上野動物園へ行つた。

百千々の文字にも代へて此鳥を君子飼へりうつくしの鳥

うらうらとてれる春日に鶯の鳥の玉水かつき遊ぶよろしも

○死の前年京都動物園に寄附した。

鶯の鳥を我がうつくしみ今日もかも池のべさらず見えつつ暮し
つ

つ

○愚庵に同居して、人形店を営んでいた伊藤源吉が狗子を彫り、
犬の子の材は「桜」と。

尋め得ざる親をなげきし人の手になでて光沢^{ひかり}つきのこる木の

犬

さんねいが結縁をして彫る犬のおのづと人に顔似たりける

眉ふとき愚庵をおもへばすみ染のころもの膝に犬をだきたる

○「アララギ」昭和八年（一九三三年）六月号及九月号中村憲

吉氏は、愚庵遺愛の木彫狗子を、斉藤茂吉氏より贈られたこと

について歌を詠んだ。

枕べに木彫の狗はひと日居れ病のひまに手をのべて撫つ
伝はれる木彫の狗子は愚庵和尚が撫でて艶つき生ける如しも

○愚庵と草二郎

愚庵は『東海遊俠伝』（次郎長物語）の原作者。清水次郎
長を世に知らしめたが、講談や大衆的読物に隠れた。

○愚庵は正岡子規の短歌革新に大きく影響した歌人であった。

良寛・愚庵・子規・伊藤佐千夫・島木赤彦・斉藤茂吉…

○愚庵は、たむろすることを好まず、生涯孤高を持した。

終

【参考資料】

○歌僧・天田愚庵「巡礼日記」を読む 松尾心空

○愚庵の生涯とその歌 大坪草二郎

○歌人・天田愚庵の生涯 堀浩良

○天田愚庵の生涯 川嶋隆史

○山口誓子全集

○漂泊の歌人僧・愚庵・蓮月尼伝 真下五一

○正岡子規の世界 寒川鼠骨

編集室だより【二〇一五年 九月】

三河アララチギ賞 遠藤脩子様

挿木して育ちし石榴に今年ひとつ結実したり枝重たげに

草木に小動物に： お気持が素直に表現されて、おもわずほえんでしまう歌を詠まれます。枝重たげにと締められたところが素晴らしく物思わせませす。

○ベルリン独日協会の事務局長、カトリン・スザンネ シュミット
女史より、シャルロテンブルク宮殿で行われる展覧会への推薦
いただき、世界の平和に短歌が参加出来ることを希み、送信
しました。しばらくして、日独国際平和文芸大賞おめでとごぞ
います。と知らせがきた。どの短歌が該当したのかな、と思っ
ている。

○トットツと仏像彫刻をはじめ、四人の仲間と二三年程たち、大
崎駅の近く、○美術館で作品展をしました。無我の二刀二刀が
思い起こされ、感慨。

○丁度秋、物思う時。「秋思 張籍作」詩吟習得中。
千年より前の中唐人の心の移ろいを漢字の中から感じとる。
秋風を見る。との表現に、今日の私のまど開ける。

○甲状腺疾患の故、月々血液検査をしている。いつものように：
がずっと続いて安定していた。今回「白血球数」が赤い数字
になり、「どうして！何したののだったかな！」しばらく考
えた。「奥歯が痛くなり、抜いた」ということがあった。忘れ
てしまっていたことも、血液検査とは見つけ出すですね。

○目黒、林試の森公園へ吟行。林業試験場の跡ということでも飾
るところがなく、木々草々そのものであることがとても好き。
リラククス出来て、自分も自分そのものになれる。

○上野・不忍池つぶち「水上音楽堂」に於いて、復興チャリティー
音楽祭・南相馬音楽祭in東京。年配の方が、歌を歌い復興
の役にたつ。なんと素晴らしいことを考えついたことだろう。感
心してしまった。

○上野・国立科学博物館。
生命大躍進・脊椎動物のたどった道へ紛れ入る。40億年の過
去からつづく今の自分にかかわる問題だから見ておかなくては
いけない。化石となって、本当のことが今に残っているのだから
疑う余地はない。年代も内容も状況も「測り知り得る」世
の中になつている。

実物ということは、本当の大きさがわかり、点ほどの化石から、
えー！こんなに大きい、どうしてこんなに姿になったのだろう！と
つてもない事実につくりすると共に、今日から四十億年が
私に加わった。しっかり携えてゆこう。

和菓子街道（109）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

姫街道(5)

三方原に戻って旅を続けよう。市野からやってきた姫街道と浜松から北上してきた公道の姫街道とが三方原で集結。この少し先から姫街道の松並木が続く。やはり街道松はいいもので、心が和む。

大谷川を渡り細江町に入ると、姫街道は県道を離れて狭い道になる。刑場跡のなんとも寂しいところを通る。暗く、落ち葉も散り積もった獣道で、馬はおろか、姫様行列などとても往来できそうにない。

暗く寂しい坂の途中には、「服部小平太最期の地」碑がある。桶狭間の戦いで今川義元の首をとった津島の武士だが、その後、徳川家臣としてこの地を治めていた。しかし、今川色の強いこの地で土民の襲撃を受けたのだという。以前、佐屋路で津島を訪れた際、地元の方が小平太のことを津島の英雄として誇らしく語っていたことが思

い出される。こんな暗い森の中で、小平太もさぞ無念だったろう。

ようやく舗装された県道に出て落合橋を渡ると、気賀宿はもうすぐそこだ。



刑場跡近くで受刑者の霊を慰める六地藏

お知らせ

△十二月号の原稿は、十月三十一日（土）までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目の送付をお守り下さい。

※原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、毎月の原稿に同封して下さい。

▽原稿の送り先
東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集三河便り

十月号の「氷魚」のことから（177）のなかで岡本八千代さんは、このように書いている。

「子規の写生説も。観たものをそのまま写すのではなくて、自分の心の動きをくりこんでゆく」と

目で見えたモノに自分の思い心をプラスし立体的に捉え、それに適合した語句そしてリズムがあつて真の写生の一首となると思つている。

頭ではわかかつてはいるが、いざ作ってみると出来ない、作りつづけてゆかない。（夏目）

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇講読を希望される方。一ヶ年分、四千元。

振替口座〇〇八三〇一六一五六二九九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆と送稿することができず。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席できます。

◇発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL・（〇三）五九二四一二〇六五

◇URL・E-mail yur188@cronos.ocn.ne.jp/
Homepage <http://maizumityuri.jp/>

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇印刷所 株式会社 桜創美

■「新シルクロード」ワイルドフェスタ

二〇一五年十月十三日（金）～十六日（月）

豊橋・ほの国百貨店六階、季節の催し会場。

■「お話し」

「シルクおもしろ雑学・絹と健康」

十二月十四日（土） ほの国百貨店十階。